
赤兎馬

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤兎馬

【Nコード】

N13710

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

様々な主達を乗せてきた赤兎馬。だが最後の主である関羽が死んだ時に。三国志にその名を残す名馬を書きました。

第一章

赤兎馬

一日で千里を走る。その噂は嘘ではなかった。

赤い毛をして鬣は漆黒だ。そして見事な身体をしている。

それが赤兎馬だ。関羽の馬だった。

「見事な馬だな」

「ああ、何時見てもな」

誰もがその姿を見て唸る。関羽の巨大な身体を乗せても全く遜色がない。彼の大柄な身体と合ってさえいる。そこまで見事な馬であった。

「思えばあの董卓の馬だったしな」

「それに呂布のな」

いずれもその素行はともかく武勇では比類なき者達であった。

「あの呂布の大柄な身体も乗せていたしな」

「それだけの馬ってことだな」

「そしてな」

誰もがさらに言うのだった。

「赤兎馬も主を選ぶからな」

「馬がか」

「主を選ぶのか」

「ああ、そうだと思うぜ」

そしてだ。こう言われた。

「董卓は確かに悪い奴だったさ」

「それでもか」

「そうだっていうのか」

「ああ、英傑だった」

これは事実だった。確かに彼は暴虐を極めた。帝都洛陽を地獄に変えた。しかしそれでも彼の軍略と武勇は確かなものであったのだ。

北の異民族達と長年戦ってきた。両利きであり左右に弓を置き両方向に弓を次々に放つことができた。軍功を重ねてきた男なのだ。

それはよく知られていた。まずは彼のことが話された。

「確かに凄い奴だったからな」

「赤兎馬が背中に乗せるだけの奴だったってことか」

「ああ、それは間違いない」

こう話されるのだった。

「あの男もな。それだけの男だったんだ」

「そして呂布か」

「あの男もか」

次は呂布の話だった。

「あの男は強かったな」

「ああ、あんな強い奴はいなかった」

「項羽に匹敵するんじゃないのか？」

霸王と言われた男だ。力は山を抜き気は世を覆うと最期に詠っている。その武勇も軍略も伝説とまでなっている。中国の歴史でも最強とまで言われている。

その項羽にだ。呂布は匹敵するとまで言われているのである。

「一人で一軍を相手にしたしな」

「ああ、虎牢関でもな」

「それからもな」

戦場で荒れ狂う、まさに獣であったのだ。彼には誰も勝てなかった。

「方天画戟だけじゃなくて弓も使えたしな」

「とにかく化け物みたいな奴だった」

「鬼神だった」

呂布についてもであった。

「あれだけ強ければな」

「赤兎馬も背に乗せる」

「あの男もか」

「そうだろうな、それだけの男だったんだよ」

呂布もそうであったと言われるのだった。そして彼は曹操との戦いに敗れ捕虜となり縊り殺された。赤兎馬はそれからその時曹操のところ にいた関羽に渡ったのだ。

「そして関羽だ」

「それだけの男だな」

「ああ、間違いない」

「あの人はな」

関羽については誰もが知っていた。蜀の劉備の義弟、そして無二の腹心として戦場を駆けていた。ただ武勇や軍略だけでなく高潔な人格でも知られそして政治というものも知っていた。まさに当代きっての英傑であったのだ。

第二章

「龍でも乗れるよな」

「ああ、龍でも鳳凰でもな」

「乗れるな」

関羽は切れ長の目で鳳眼である。それも言われていた。

「それこそな」

「それなら赤兎馬もか」

その背に乗せるというのだ。確かに関羽ならば、だった。関羽はその赤兎馬と共に戦場を駆け、だ。多くの敵を倒し勝利を手にした。そして劉備の為に戦っていた。

しかしである。その彼がだ。呉の孫権との戦いに敗れ捕虜となった。そこで彼の下に入るのを拒みそのうえで処刑された。その時赤兎馬も彼のものとなった。

しかしである。赤兎馬は誰もその背に乗せることはなかった。

誰も乗せずだ。ただ厩舎でいるだけだった。誰かが近付けばそれだけで激しく暴れる。それはまるで肉を喰らう獣の様であった。

その赤兎馬の話を聞いてだ。孫権は言うのだった。見事な紫の髭を生やし目は青い。端整というよりは威厳のある顔だ。その彼が話を聞いて言ったのだ。

「そうか、誰とも会おうとしないのか」

「はい」

彼に伝えているのは若々しい端整な美男子である。目の光が強く尚且つ賢明な雰囲気の中にいる。彼の名は陸遜という。今の呉の大都督である。

その彼が孫権に対して話すのだった。主の座にいる彼にだ。

「来ればそれだけで虎の如く暴れます」

「そうか。そして草は」

「草も水もです」

首を横に振っての言葉だ。

「食べようとしませんかし飲もうともしません」

「どちらもか」

「はい、このままでは間も無く」

「何とか食べさせよ」

孫権は重厚な声で陸遜に告げた。

「あのまま死なせるには惜しい馬だ」

「はい、ですが」

「ですが？」

「赤兎馬がその背中に乗せることを許す者がいるでしょうか」

陸遜の目が曇っていた。その強い光を放つ目がだ。

「我が国に。この呉に」

「いないというのか」

「かつて董卓、そして呂布を背に乗せ」

こう主に話すのだった。

「そして関羽も乗せてきました」

「誰も天下の英傑だな」

「紛れもなくです」

陸遜の言葉は強い。

「それは」

「だが。我が呉には」

ここだ。孫権の顔が曇った。それは陸遜にもわかった。

第三章

「いないな」

「それは」

「いや、いない」

それをはっきりと言ったのである。

「一人としてだ。いない」

「そう仰るのですか」

「私もだ。私も呂布や関羽とは英傑としては劣る」

国の主としては別だというのだ。彼はそうした意味で英傑ではないというのだ。戦場を駆け巡り戦う、そうした英傑ではないというのである。

そしてだ。彼はまた言うのだった。

「だからか。この国には赤兎馬が認める英傑はいないのか」

「呉だけでしょうか」

「というかどうかということだ？」

「魏にも蜀にもです。赤兎馬が認めるだけの者がいなくなったということではないでしょうか」

陸遜の言葉だ。

「だからこそ赤兎馬はです」

「死のうというのか」

「そうではないでしょうか」

こう話すのである。

「何も食べようともせず飲もうともせず」

「死のうというのか」

「自らが認めた相手がなくなったからではないでしょうか」

「そういえば常に関羽と共にいたな」

このことも話される。

「そうだったな」

「はい、戦場の他にも」

「関羽を認めていたのか」

孫権の言葉が深いものになっていた。

「そうだったのだな。だからこそ余計に」

「彼の義弟の張飛ですらその背には乗せようとしなかったそうですし」

彼もまた蜀の猛将である。武勇では関羽より上とまで言われている。しかしその彼ですら認めなかったというのである。その背に乘せることをだ。

「ですから。最早何処にもそうした英傑は」

「わかった。それではだ」

「どうされますか」

「赤兎馬の好きにさせよ」

孫権はその重厚な声で告げた。

「よいな、好きにだ」

「好きにですか」

「そうだ、好きにだ」

陸遜に対しての言葉だ。

「そうさせよ。いいな」

「わかりました」

陸遜も孫権のその言葉に対して頷いた。

「それではその様に」

「惜しいがな」

ここで僅かに未練も見せはする孫権だった。

「それでもだ。赤兎馬がそうするというのがならな」

「そうさせるもですか」

「情だ。関羽があくまで私に降らなかったのと同じだ」

関羽は劉備以外の主には仕えようとしなかったのだ。彼の忠義はあくまで劉備にだけあるものだった。そして彼は潔く処刑されたのである。

「それとだ」

「その関羽を主としていた赤兎馬もまた」

「同じだ。それではだ」

「その様に」

こうして赤兎馬は無理に餌も水も与えられなかった。そしてそのうえで静かに死んだ。孫権は彼が死んだと聞いて今度はこう言うのだった。

「丁重に葬るがいい。礼を以ってな」

こうして赤兎馬は孫権により丁重に葬られた。それはまるでかなり高位の貴族の様であった。だが少なくとも孫権は赤兎馬にそれに相応しいものを見ていた。それは間違いなかった。

赤兎馬の話は今にも残っている。中国の長い歴史でも屈指の名馬だ。その名馬に相応しい主を選びその主に殉じそれに相応しい最期を遂げた。これは歴史にある通りである。

赤兎馬

完

2010・5・5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1371o/>

赤兎馬

2010年10月8日12時12分発行